3-9	演題	可視化されたデータに基づく排泄援助
	副題	

介護ロボット	法人名	社会福祉法人 育生会
排泄介助	施設名	よつば苑

発表者名（職種）	和田　善樹 介護職員	都道府県	神奈川県
共同発表者	木船　卓宏	住所	横浜市保土ヶ谷区狩場町 200 番地 9
共同発表者		TEL	045-712-8601
共同発表者		FAX	045-712-8605
共同発表者		メールアドレス	yotsuba@fuku-ikuseikai.com
共同発表者		URL	

今回の発表施設またはサービスの概要	社会福祉法人育生会は、平成８年に、特別養護老人ホームよつば苑（保土ヶ谷区狩場町）定員 120 名（入所 112 名、短期８名）開設。令和元年５月に、特別養護老人ホームひまわり港南台（港南区日野南）定員 180 名（入所 170 名、短期 10 名）開設。

研究の目的、PR ポイント

従来型特養での排泄援助は定時誘導や定時オムツ交換が主な方法となっているが、尿意を伝えられない利用者にとっては、タイミングが合わず「排尿無し」や、オムツ内の不潔な状態が長く続く事での「不快、不衛生」に繋がっている。加えて、不快感や尿意を上手く伝えられない事が認知症の BPSD を引き起こす原因となっているのではと考えていた。今回、膀胱内の畜尿量が視覚化出来る福祉機器「Dfree」の導入により、定時誘導から「お知らせ通知」による随時誘導に切り替えることで、「放尿せずトイレで排泄出来る」よう取り組んだ事例を紹介する。

取り組んだ課題

徘徊や放尿等の BPSD が顕著に見られている A さん。尿意はあるがパターンは掴めず、トイレへの定時誘導を行ってもタイミングが合わない。トイレまで誘導しても拒否をされて出て行ってしまう事が多くみられていた。常にフロア内を歩き周っては、誰もいないお部屋やカーテンの裏に放尿を繰り返す。床が濡れた不衛生な環境は、他利用者への２次被害にも繋がることから迅速な対応が求められていた。

具体的な取り組み

① 指導者の育成
各階フロアリーダーへ福祉機器の使用方法をメーカーより説明。
② 対象フロア、対象利用者の選定
利用者、職員の少ない階をモデルとして優先的教育を行う。
③ ４階介護職員へ勉強会、指導開始　（２週間）
④ A さんへ機器装着しデータ取得、環境調整開始
⑤ 福祉機器からの「お知らせ通知」を基に随時誘導を開始
可視化されたデータを根拠とし、本人が拒否した場合でもタイミングや介護者を変えて、可能な範囲で随時誘導を行う。

活動の成果と評価

＜福祉機器導入前＞
１日１～２回、週４日　放尿有り
＜福祉機器導入後＞
１日０回、週０日　　放尿無し
放尿が無くなりトイレでの排泄が出来るようになったことで A さんの尊厳が護られる事に繋がった今回の取り組みは、新しい機器を導入し「トイレで排泄する」という「当たり前」に挑んだ職員たちの成長にも繋がった。

今後の課題

① 個別ケアへの理解
介護業界の人手不足により業務量が増加している状況の中で、個別ケアの必要性、重要性を理解してもらえるように創造、実践する事が求められる。
② 福祉機器のデメリット改善
Wi-Fi 環境、皮下脂肪の状態などにより、データ取得が困難な場合があり、調整期間に時間を要する。
又、皮膚の弱い方では装着部位に発赤が発生した。

参考資料など

トリプルダブリュージャパン株式会社